

# KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

阪神・淡路大震災30年特別号

第109号 2025年(令和7年)3月20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1

TEL: (078) 371-3351 FAX: (078) 371-5046



リニューアルした神戸港震災メモリアルパーク。保存ゾーンを北側から見た眺め。左奥は中突堤の神戸メリケンパークオリエンタルホテル。手前中央は被災した岸壁に立つ傾いた灯り。海に没した階段や船をつなぐ柱に、波が打ち寄せる

絵葉書「神戸アメリカ波止場」(明治末～大正初頃・神戸市立中央図書館蔵)南側からの眺め。左手前から奥にまっすぐ続いているのがメリケン波止場の東側岸壁。海沿いの海岸通には銀行やホテルが立ち並び、背後には六甲連山が見える



復興ゾーンでは、神戸港の被災状況、復興の様子を、パネルや多言語対応の動画でわかりやすく伝える



## 神戸港震災メモリアルパーク

メリケンパークは、中突堤からメリケン波止場の間を埋め立て、昭和六十二年(一九八七)にできた公園です。明治初期にアメリカ領事館が近くにあったことからその名で呼ばれたメリケン波止場は、かつては多くの外国船が停泊し、異国情緒にあふれた神戸の玄関口でした。

阪神・淡路大震災で、神戸港は甚大な被害を受けましたが、国や自治体、港湾関係団体等の尽力により施設の復旧工事が完了しました。「大震災の教訓と港の重要性、さらに国内外の多くの人が一体となって復興、復興に努めた様子を後世に伝えること」を目的として、平成九年(一九九七)、公園の東側に神戸港震災メモリアルパークが設置されました。被災した岸壁のうち、約六〇mの間をそのまま被災遺構として保存し、海上からも震災の爪痕が見られるように回遊路が設けられています。崩れたままの岸壁は震災の被害をまざまざと想起させます。

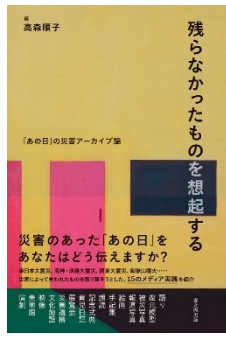
震災三〇年となる今年一月に施設の改修工事が完了しました。国内外から観光客が訪れる美しいエリアで、神戸が経験した震災の記憶と復興の力を人々に伝え続けています。

\*『神戸港港湾施設復旧誌』

参考…『文化財保存70年の歴史』ほか

残らなかったものを想起する 「あの日の」の災害アーカイブ論 高森順子編（堀之内出版）

災害に関する記憶、手記、語り、写真、映像、遺構などの「災害アーカイブ」を後世に残す活動の実践事例を集めた論文集である。編者は災害体験の記録や表現を専門とする研究者であり、自身も子どもの頃に阪神・淡路大震災を経験している。本書には、編者が事務局長を務める「阪神大震災を記録しつづける会」による、被災体験を綴った手記を収集して出版する活動や、東日本大震災で津波に遭う前の街並みを地域住民と共に模型で復元する取組など、多様な事例が取り上げられている。



シン防災 災害研究のこれまでとこれから 神戸学院大学現代社会学会編（昭和堂）

二〇一四年に開設された神戸学院大学の社会防災学科は、災害時に一人でも多くの命を救えるよう防災研究の成果を社会に伝えるとともに、被災地支援などの社会貢献活動にも取り組んできた。防災の基本である「自助」「共助」「公助」に、近くの人が助ける「近助」を加えることを提唱するなど、これからの防災学をわかりやすく説明する。

神戸 戦災と震災 村上しほり（筑摩書房）

阪神大水害、神戸大空襲、阪神・淡路大震災により壊滅的な被害を受けた神戸のまちは、災害からどのように復興してきたのか。都市史・建築史を専門とする著者が、都市計画と市民の生活に焦点をあて、明治期から現代までの都市形成の歴史を明らかにする。「阪神・淡路大震災と『復興』」の章では、新長田駅南と六甲道駅南の地域での震災復興再開発事業や、震災の記憶・記録を伝える活動を三〇年後の視点から考える。

冬と瓦礫 砂原浩太郎（集英社）

著者は二〇一六年に作家デビューし、時代小説を発表し続けてきた。本作は筆著自身の体験をベースに執筆した初の現代小説。主人公は神戸の高校を卒業し、東京へ進学・就職した。阪神・淡路大震災の発生を知り、三日後に被災した故郷の家族や友人に会いに行く。しかし、どこか傍観者の的な立場の自分と当事者である被災者との気持ちの隔たり、そして複雑な家族関係もあいまって、言いようのないもどかしさを感じる。

女たちが語る阪神・淡路大震災1995-2024 いたいことがいっぱいあった 女性と子ども支援センターウイメンズネット・こうべ編著（ペンコム）

一九九六年に出版された『女たちが語る阪神大震災』は震災直後の女性たちの生の声を掲載し、大きな反響があった。続編となる本書では、三〇年前の執筆者のうち約二〇人が寄せた新たな手記を併記。苦難や理不尽さに直面しても、多くの女性は声を上げることが難しくかった当時から、何が変わり、何が変わらないのだろうか。

喪失、悲嘆、希望 阪神淡路大震災その先に 堀内正美（月待舎）

俳優である著者は、復興の合言葉となった「がんばろう神戸」の発案者として知られる。一九八四年に東京から神戸市北区に転居、阪神・淡路大震災で被災しながらも、市内の惨状を目の当たりにして市民ボランティアのネットワークを立ち上げ、被災者の支援を始めた。その後も自然災害に限らず、事件・事故の被害者や愛する人を突然失った遺族への支援を続けている。本書では市民の立場からこの三〇年に目を向け、自身が直面した問題や復興支援の課題を詳細に描き出し、過去の経験が将来につながるというメッセージを送っている。





**五感でとらえなおす阪神・淡路大震災の記憶** 関西学院大学震災の記録プロジェクト 金菱清（ゼミナール）編（関西学院大学出版会）

学生たちが阪神・淡路大震災の当事者たちに聞き取りを行い、五感（嗅覚・味覚・触覚・視覚・聴覚）を手掛かりに災害を読み解く。遺体安置所の「匂い」の記憶、肌で感じるその町に残る「味わい」、亡くした家族に夢の中で「触れる」体験、視覚障がい者の「見えない」環境での被災体験、救助活動で倒壊した家から声を「聴いた」記憶など。当時のリアルな感覚や、震災後も残り続ける感覚を伝えることで、五感という新しい視点から震災を考えるきっかけを与える。



## Ⅱその他の新刊Ⅱ

**震災30年を未来へつなぐ 神戸大学と阪神・淡路大震災 神戸大学阪神・淡路大震災30年事業委員会**（神戸大学）

### 震災関連資料室 展示リニューアルのお知らせ

中央図書館二号館三階の震災関連資料室では、当館が阪神・淡路大震災の直後から収集を続けている震災関連資料の一部を展示しています。震災三〇年事業として、二〇二四年十二月二十七日、展示内容をリニューアルしました。テーマは「継承と備え 阪神・淡路大震災30年」。三〇年の間に出版された資料から、震災と向き合い続ける人々や社会の変化をたどりまます。また、防災・減災につながるよう、個人でできる防災の工夫に関する本などを紹介しています。震災をテーマとした絵本や防災の本を、手に取ってご覧いただけるコーナーも設けました。資料室にいられた方々の備えの一助となることを願っています。



### 神戸 その32 あんな人こんな人

**中井 久夫 なかい・ひさお**  
昭和9年(1934)～令和4年(2022)

中井久夫は奈良県天理市に生まれ、精神科医、精神分析学者で、文筆家としても知られる人物です。精神分析や臨床心理学の分野で多くの重要な業績を残し、阪神・淡路大震災とも深い関わりがあります。震災当時は神戸大学医学部精神神経科に教授として在籍、発災直後から被災者の心的外傷に現場で向き合い、後に「心のケア」と呼ばれる精神支援に取り組みました。中井は、当時の状況について筆を取り続け、発災からわずか2週間後から、編集者へ原稿を送り始めました。その手記と仲間の精神科医から集めた記録を編集し、震災から2か月後に『1995年1月・神戸「阪神大震災」下の精神科医たち』を、次いで『昨日のごとく 災厄の年の記録』を出版しました。ここに書かれた内容は、自身の精神状態から非常時の精神科救急ネットワークの構築などにまでおよび、現在にも生かされている貴重な記録です。

2011年に東日本大震災が起こったとき、ノンフィクション作家・最相葉月がこれらの記録を役に立つと評価したことが契機となり、新稿が加えられ『災害がほんとうに襲った時 阪神淡路大震災50日間の記録』と『復興の道なかばで 阪神淡路大震災一年の記録』として緊急出版されました。

中井が当初から言い続けていた、「『その場にいること』がボランティアの第一の意義である」という言葉は、現在のボランティアのあり方にも影響を与えています。

【参考】最相葉月『中井久夫 人と仕事』（みすず書房、2023）ほか



## 生田神社

寒い季節が過ぎ、ようやく芽吹き  
の春がやってきました。春といえば  
昔、生田神社附近が桜の名所として  
有名だったことをご存じでしょうか。  
江戸時代、生田神社の社前から海岸  
に至るまでの約八町（約八七〇メー  
トル）の参道は、両側に桜や梅の木  
が連なり、春の景観が特に美しかっ  
たため、花見客で大層賑わったよう  
です。江戸時代の摂津国の観光案内  
書である『摂津名所図会』では「生  
田桜馬場」や「生田花見円居遊宴の



「生田馬場桜花」『神戸覧古 上』より

神戸市立中央図書館  
貴重資料デジタルアーカイブズ  
※当館HPからご覧いただけます

図」として、江戸時代末期の神戸の  
様子を描いた『神戸覧古』でも「生  
田馬場桜花」として取り上げられて  
います。また、俗謡でも「婆々じや  
ばじやと云はんすけれど、生田の  
馬場には花が咲く」「梅は岡本、桜  
は生田、松のよいのが湊川」と謡わ  
れるほどでした。しかし、開港に  
伴って都市化が進められ、木は伐採  
されてしまいます。参道は南が外国  
人居留地の一部となり、北には商店  
が立ち並び鉄道が通るなど、かつて  
の参道の風光明媚な景観は失われま  
した。

ところで生田神社とはどのような  
神社でしょうか。生田神社の御祭神  
は稚日女尊（わかひめのみこと）です。「稚くみずみずしい  
日の女神」という意味で、伊勢神宮  
にお祀りされている天照大神の幼い  
頃の名前とも、妹神とも伝えられて  
います。『日本書紀』によると創建は  
神功皇后摂政元年（二〇一）でも  
ともとは砂山（いさやま、現在の中央区葺合町、  
徳光院南側の丘）に鎮座していまし  
たが、延暦十八年（七九九）に洪水  
で布引の溪流が氾濫した影響を受け、  
現在の場所に移座したとのことです。  
平安時代中期には『延喜式』に名神  
大社として列せられ、明治二九年

（一八九六）には官幣中社に列せら  
れており、多くの人々から崇敬され  
てきました。

長く続く歴史の中で、生田神社は  
戦や空襲、自然災害などで多くの被  
害を受けてきました。しかし、その  
都度立ち上がり復興してきたことか  
ら、「甦りの社」とも呼ばれています。

今年で発生から三〇年が経った阪  
神・淡路大震災でも、生田神社は大  
きな被害を受けました。石の鳥居や  
石灯籠などの石造物はほとんど倒壊  
し、木造建築の拝殿は銅板葺の屋根  
の形を残したまま崩れました。その  
様子は全国に報道され、人々に衝撃  
を与えるとともに、地震による被害  
の大きさを伝えました。

生田神社は一日でも早い復興を、  
と震災後すぐに「伝統建築に最先端  
の工法を取り入れる」というコンセ  
プトで復興建築計画を定めました。  
拝殿は二六本ある柱のすべてに鋼管  
コンクリート柱を採用し、当時の世  
界最高強度のコンクリートを充填し  
て高い構造耐力（垂直や水平方向の  
力に耐える力）を持たせました。ま  
た、柱と屋根の接合部分には鋼鉄の  
鋳物を使用し、地震に強い建物に生  
まれ変わりました。こうして生田神

社は震災からわずか一年半ほどで社  
殿の復興を果たします。その姿は神  
戸市民の希望となり、まちの復興を  
後押しする大きな力となりました。



生田神社の震災復興記念碑

生田神社の宮司によって詠まれた  
歌が二首刻まれています

生田神社の境内には、平成十二年  
（二〇〇〇）一月に震災復興記念碑  
が建立されました。その他、安政元  
年（一八五四）の大地震で崩れた「生  
田の折れ鳥居」や神戸大空襲で焼け  
ただれた楠の神木など、神戸の歴史  
を物語る痕跡がいくつも残されてい  
ます。「甦りの社」を散策しながら、  
神戸の歴史と春の風を感じてみま  
せんか。

### 参考文献

『生田神社 阪神大震災復興  
の記録』、『生田神社』加  
藤隆久（学生社）、『生田神  
社史』、『神戸観光要覧』、  
『神戸古今の姿』ほか

世界を  
ひろげる、  
ほんとの  
出会い。  
神戸「水」の文化振興プロジェクト



この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。